

北泉遺跡発掘調査報告書

—北泉遺跡第1次発掘調査—

平成26(2014)年3月

吹田市教育委員会

第1章 位置と環境

(1) 地理的環境（第1図）

吹田市は大阪府北部に位置する。南は大阪市と境界を接するが、その市境にはほぼ沿うような形で安威川・神崎川が北東から東南に向けて流れている。

吹田市域南側には、主に神崎川や淀川などの氾濫によって形成された沖積平野が広がり、一方の市域北部は千里丘陵が占めており、市域の北部と南部としては対照的な地形を形成している。

吹田市内において千里丘陵は標高80m以下の丘陵地帯となる。平野部については千里丘陵南端部付近を境として、東側を安威川低地、西側を神崎川低地として区分される。またJR吹田駅付近より南側には、繩文海進時に形成されたとされる吹田砂堆が広がり、平野部において微高地を形成している。



第1図 吹田市周辺の地形
(前田 1990 文献を基に作図)

(2) 歴史的環境～吹田の弥生時代～（第2図）

今回の発掘調査では弥生時代を中心とした資料が得られたことから、ここでは吹田市の弥生時代の遺跡について概観しておく。

まず吹田市の代表的な弥生時代の遺跡として垂水遺跡が挙げられる。同遺跡は千里丘陵の南西端に営まれた高地性集落として知られている。関西大学が行った第1～3次調査では、弥生時代後期の竪穴式住居4棟と、掘立柱建物1棟が出土し、続く本市が行った第4次調査では、甕棺墓が出土した〔網干 1981〕。丘腹鏡で行った第21次調査では、弥生時代から古墳時代前期にかけての土器が多い量に出土したのをはじめ〔吹田市 2005〕、第26次調査では古墳時代前期の土器に混じって、弥生時代前期末葉の壺が完形で1点出土した。また丘陵下南側に広がる平野部においても、やや地中深くに弥生時代の遺物の包含が確認されている。

丘陵上で見れば、新芦屋遺跡、青葉丘遺跡などで弥生時代の遺物が確認されているが、現在の万博公園がある千里丘陵北東部においては、明治11（1878）年、溜池工事中に弥生時代中期の四区製塼樽紋銅鐸が出土し、山田銅鐸出土土地として周知されている。

一方平野部では、安威川低地側に位置する、中ノ坪遺跡、高城遺跡、高城B遺跡、吹田操車場遺跡、天道遺跡、吹田砂堆上に位置する都呂須遺跡、高浜遺跡、神崎川低地側に位置する垂水南遺跡、五反島遺跡、藏人遺跡、榎坂遺跡、泉遺跡などで弥生時代の資料が確認されている。

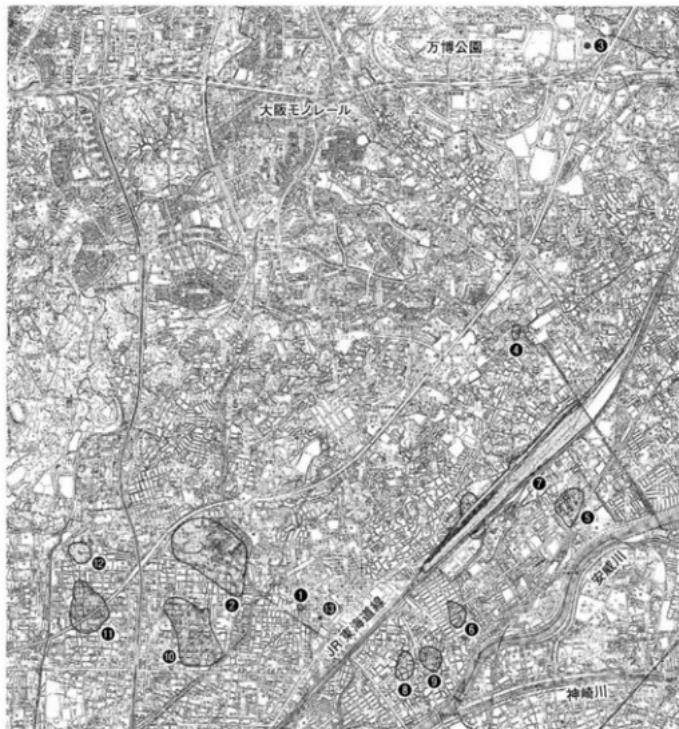
安威川低地側の遺跡では、七尾東遺跡第1次調査において、同一地点で5回の建替えを行った痕

跡を持つ弥生時代中期後半の竪穴式住居が確認されている〔吹田市 2002〕。また中ノ坪遺跡第3次調査では、方形周溝墓の可能性もある弥生時代中期後半の平面「コ」字形の溝が検出されている〔吹田市 2012〕。

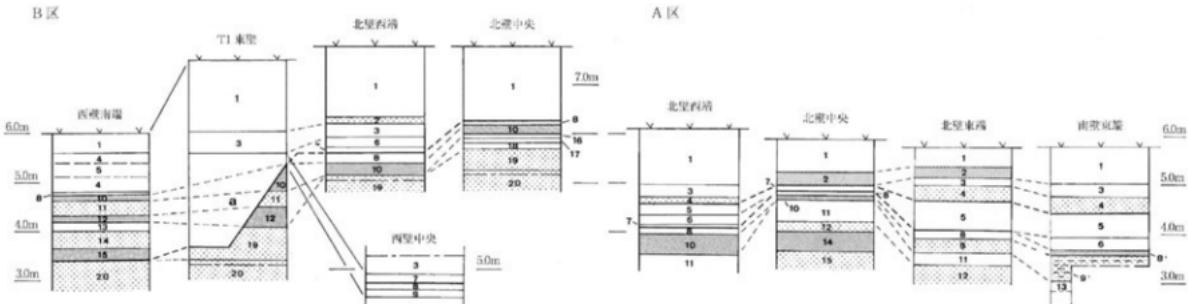
神崎川低地側の遺跡では、垂水南遺跡第58次調査において河道理埋土中より弥生時代中期から古墳時代中期にわたる土器が良好な多量な状態で出土し、近年になってこれまで同遺跡で知られていなかった弥生時代中期後半の資料が確認できた。また五反鳥遺跡や藏人遺跡、桜坂遺跡においても、河道や流路跡埋土中より弥生時代後期を中心とする遺物が良好な状態で多量に出土している。

【参考文献】

- 網干善教（編） 1981「考古編」『吹田市史』第8巻 吹田市史編さん委員会・吹田市役所
吹田市教育委員会 2002『七尾東遺跡発掘調査報告書』
吹田市教育委員会 2005『垂水遺跡発掘調査報告書』I
吹田市教育委員会 2012『中ノ坪遺跡発掘調査報告書』I
前田昇 1990「地質と地形」『吹田市史』第1巻 吹田市史編さん委員会・吹田市役所



第2図 周辺の遺跡分布図 (S = 1/40,000 上方が北)



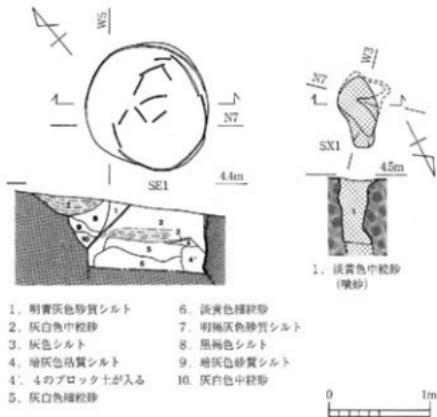
B区

- 1. 現代の盛土（未実測部分を含む）
 - 2. 灰白色細粒砂
 - 3. 褐灰色粘質シルト
 - 4. 灰白色砂質シルト
 - 5. 灰色粘土
 - 6. 淡黄色砂質シルト
 - 7. 暗灰色粘質シルト
 - 8. 暗紫灰色シルト質粘土（第1面ベース）
 - 9. にぶい黄色砂質シルト
 - 10. 黒褐色シルト質粘土（第2面ベース）
 - 11. 明オリーブ灰色砂質シルト
(黄色中粒砂を含む)
 - 12. 黒褐色粘質シルト
 - 13. 灰色粘質シルト
 - 14. 灰白色細粒砂
 - 15. 黑褐色粘質シルト
 - 16. 灰色粘質シルト
 - 17. 暗灰色粘質シルト
 - 18. 褐灰色砂質シルト
 - 19. 暗灰色粘土～青灰色中粒砂
 - 20. 明青灰～灰白色シルト質中粒砂
- a. SG1 埋土

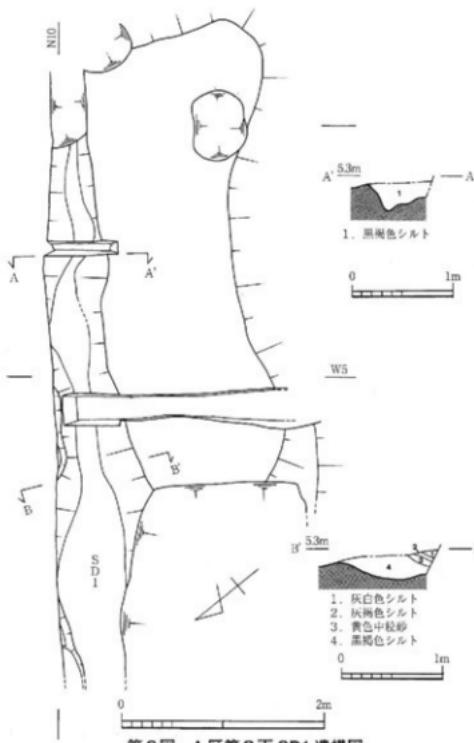
A区

- 第1層：現代の盛土
- 第2層：暗青灰色砂質シルト
<旧耕土>
- 第3層：灰白色砂質シルト
- 第4層：淡黄色中粒砂
<遺物をやや多く含む>
- 第5層：灰色細粒砂質シルト
<遺物をやや多く含む>
- 第6層：明褐色砂質シルト
- 第7層：灰色砂質シルト（第1面ベース）
- 第8層：暗紫灰色粘質シルト（中粒砂を含む）
<遺物を多く含む>
- 第9層：灰白色中粒砂
- 第9'層：黒色粘土～灰色中粒砂互層
- 第10層：黒褐色粘質シルト（中粒砂を含む）
<遺物を多く含む>
- 第11層：紫灰色砂質シルト（第2面ベース）
- 第12層：灰白色シルト質細粒砂
- 第13層：にぶい褐色砂質シルト
- 第14層：黒色粘質シルト（第3面ベース）
- 第15層：淡黄色中粒砂
<遺物をやや多く含む>

第4図 基本層序柱状図 (S = 1/100 水平距離は任意)



第5図 A区第1面各遺構



第6図 A区第2面SD1遺構図

(2) 検出遺構と遺構出土遺物

発掘調査では、A区で計3面、B区で計2面の遺構面を検出した。但し後述する地震に伴う噴砂（砂脈）については、本来は第1面相当の自然遺構であるが、作業の関係上A区では最終面の段階で図化を行った。以下に順を追って、各遺構面と主な遺構・遺物の概要を記す。

[A区]

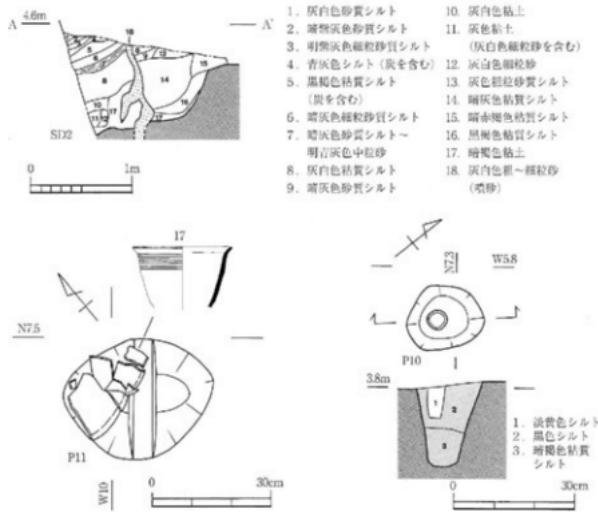
a. 第1面 (第5・24図、図版1) 調査区中央の高まり部分において、第7層（灰色砂質シルト）をベースにして井戸1基、土坑2基、ピット9基、噴砂1か所などを検出した。

井戸SE1 掘り方は平面円形を呈し、東西1.24m×南北1.32m、深さ67cm以上を測るが、未完掘のため深さは不明である。井戸側（枠）は腐植土と化して痕跡のみが残存していたため、遺物として取り上げることはできなかった。井戸側は掘り方との隙間がほとんどなく、薄い板状を二重に巻いたような状況であり、曲物を転用した井戸であったと思われる。この井戸側は、噴砂による変形を受けた状況が見られた。

井戸側埋土から土師器甕・鉢などが出土したが、いずれも図化困難な小片であり、遺物から年代を特定することはできなかつた。

土坑SK1 平面形は検出部分で半円形を呈し、調査区北側へと展開する。東西78cm×南北50cm以上、深さ54cmを測る。埋土中から陶器甕（1）が出土した。

1は京焼系陶器で、底部1/5の破片か



第8図 A区第3面各遺構

掘り残しの可能性もある。埋土は黒褐色～暗灰色シルトが主体で、一部に砂とシルトが互層になる部分も認められたが、明確な流水痕は見られなかった。

埋土中から弥生土器壺（6～10・110・113～115・117・118）・大型鉢（16）・壺、土師器壺（11）・壺（13）・高壺・皿（14）・瓦器・瓦質土器火鉢（15）・石器前器（248）・サヌカイトの石核片（245）・剥片（261）などが出土した。

6～10は壺である。6は、口縁部1/3の破片からの反転復元である。残存高11.0cm、口径27.8cmを測る。口縁端部に刻み目と、体部外面に6条のヘラ描き沈線紋を施す。7は、口縁部1/11の破片からの反転復元である。残存高5.8cm、口径23cmを測る。口縁端部に刻み目を施し、体部外面に叩き目痕が微かに残る。9は、口縁部1/9の破片からの反転復元である。残存高5.5cm、口径21.2cmを測る。口縁端部に刻み目を入れた凸帯を貼り付け、体部外面はハケ調整後に4条のヘラ描き沈線紋を施す。播磨系か。6～10は、ともに畿内第I様式（弥生時代前期）である。

11は東部四国系の広口壺で、口縁部1/6の破片からの反転復元である。残存高2.2cm、口径17.6cmを測り、口縁端部が上下に拡張される。13は布留式壺である。口縁部1/5の破片からの反転復元で、残存高6.8cm、口径13.6cmを測る。口縁端部が肥厚して内傾し、体部外面は縦方向のハケ調整後に肩部に、横方向のハケ調整を施す。体部内面はヘラ削りを施す。11・13は古墳時代前期（4世紀代）の所産である。

14は、口縁部1/6の破片からの反転復元である。器存高1.5cm、口径12.9cmを測る。鎌倉時代（13世紀代）の所産である。15は、残存高3.5cmを測り、口径は小片のため不明である。口縁部に3条

c. 第3面（第7～9・

25図、図版3）中央部北寄り付近において、第14層（黒色粘質シルト）をベースにして東西方向の溝2条、ピット3基、噴砂2か所を検出した。

溝SD2 緩やかにカーブしながら東西方向に走向し、断面形は逆台形を呈する。全長12.4m以上×幅2.2m、深さ79cmを測る。第2面検出のSD1とはば重複することと、埋土が酷似している点から、上記遺構の



第12図 B区第1面遺構図

の凸帯の痕跡が残り、花菱のスタンプ紋様を施す。室町時代（15・16世紀代）の所産である。

16は、それぞれ口縁部1/4と底部1/3の破片からの反転復元である。上下の破片は接合できないが、出土地点や色調・胎土等から同一個体と思われる。上半部は残存高17.0cm、口径46.0cmを測り、下半部は残存高4.6cm、底径10.0cmを測る。同一個体と仮定した場合、復元高は約25cmとなる。頸部に貼付け凸帯を施して二重口縁状を呈し、体部内面にハケ調整を施す。色調は、外内面ともにぶい赤褐色を呈する。山陰系の土器であろうか。

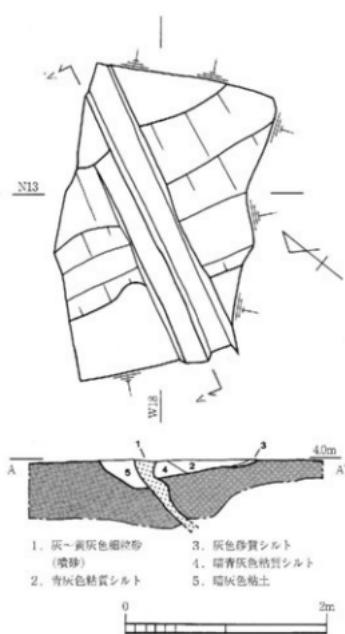
110は弥生土器壺で、口縁端部に刻み目と、体部に5条のヘラ描き沈線紋を施す。113～115・117・118は弥生土器壺である。いずれも体部に、刻み目を施した多条の貼付け凸帯を施す。特に114は、刻み目を綾杉状に交互に角度を変える。ともに畿内第I様式（弥生時代前期）に相当する。

245は最大長5.8cm、最大幅4.5cm、最大厚1.6cmを測る。248は最大長4.5cm、最大幅1.0cm、最大厚0.8cmを測る。

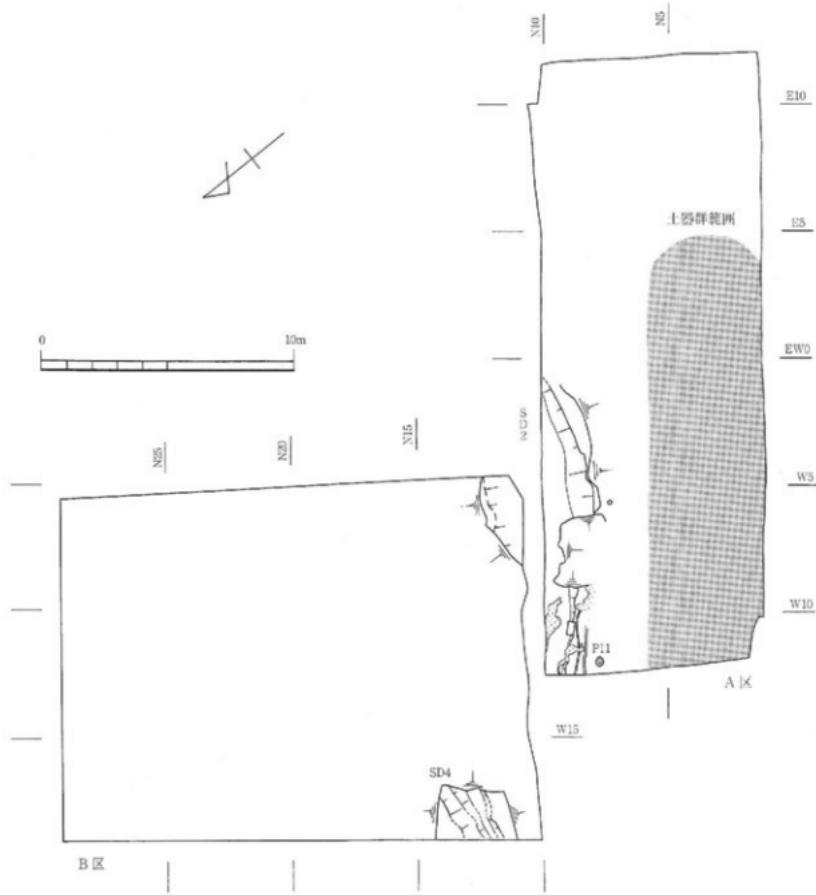
ピットP10 柱穴と思われるピットである。平面形は楕円形を呈し、東西15cm×南北19cm、深さ19cmを測り、柱痕は直径4cm、深さ7cmを測る。埋土中から遺物は出土しなかった。

ピットP11 平面形は楕円形を呈し、東西37cm×南北30cm、深さ5cmを測る。埋土中から弥生土器壺（17）が出土した。

口縁部1/2の破片からの反転復元で、残存高12.4



第13図 B区第2面SD4遺構図



第25図 第3面（弥生時代）

(2) 土器類

発掘調査では多くの土器類をはじめとする遺物が出土した。土器類は遺構埋土出土よりも遺物包含層中からの出土が圧倒的に多く、中でも弥生・古墳時代等の土器が多量に出土した。今回の発掘調査では住居跡などは検出されていないが、当調査地周辺に弥生時代から古墳時代前期頃にかけての集落が存在していた可能性が高いと言える。

遺物については個体数を計測していないが、コンテナ数ではA区からの出土遺物が全体の約8割

図版 1 A区 第1面遺構



全景（西北から）



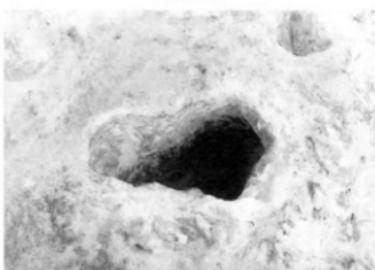
井戸 SE1



土坑 SK1



井戸 SE1 断面



SX1（噴砂）

図版2

A区

第2面遺構



第2面検出過程（南から）



溝 SD1 (西北から)



溝 SD1 断面



溝 SD1 遺物出土状況

図版3 A区 第3面遺構



全景（西北から）



溝 SD2（西北から）



溝 SD2 断面



ピット P11 遺物出土状況

図版4 A区 土器群SU1(1)



土器群SU1 全景



弥生土器台 (19)



弥生土器壺 (22)



弥生土器壺 (31)



弥生土器壺 (30)

図版 5 A区 土器群SU1(2)・包含層遺物出土状況



弥生土器壺（32）



弥生土器壺（26・29）



弥生土器壺（25）



弥生土器壺（28）



弥生土器鉢（20）



土器群SU1全景（東南から）



土師器高环（48）



弥生土器壺（59）

図版 6 B区 土器群SU2・包含層遺物出土状況



土器群 SU2 全景（西南から）



弥生土器壺（222）



弥生土器鉢（216）



弥生土器壺（235）



弥生土器壺（238）



A区 噴砂 SX2・3 (西南から)



B区 噴砂 SX4・5 (西北から)



噴砂 SX5 断面



池 SG1 堆積物のズレ



A区 北壁（中央部）



A区 北壁（東端部）



A区 北壁（西端部）



B区 南壁

図版9 発掘調査の経過



発掘調査前（南から）



人力による土層掘削



A区 遺物取り上げ



A区 土器群SU1 の実測



B区 土器群SU2 の検出



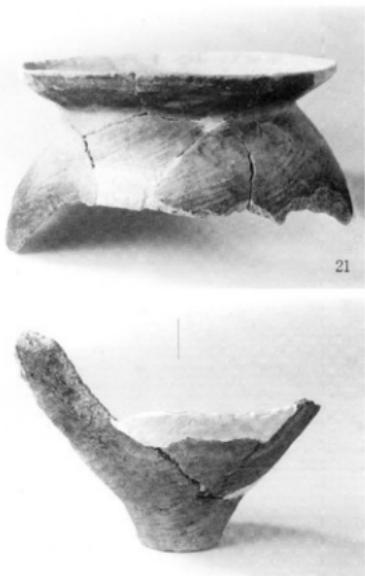
B区 北壁断面の実測



B区 南端部の造構検出

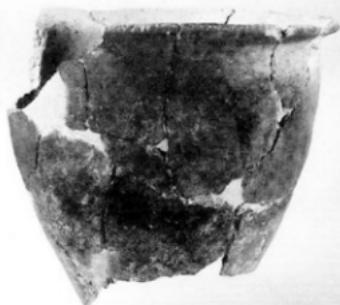


図版 10
A区 土器群 SU 1 (1)



番号なしは実測図未掲載

図版 11 A区 土器群SU1 (2)



18



20



27



26

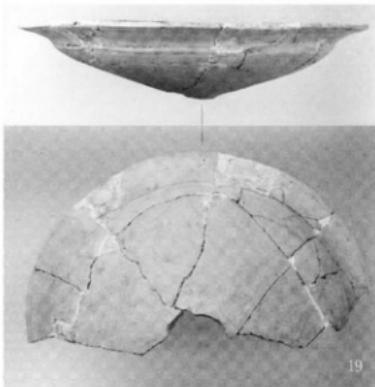


23



29

図版12
A区 土器群SU1 (3)



19



32



31



30



25



番号なしは実測図未掲載

図版 13 A区 包含層出土遺物(1)



69



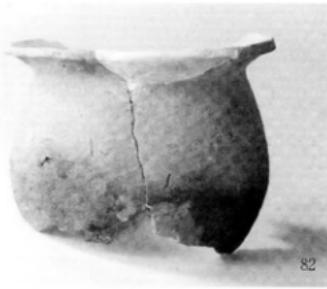
64



65



80



82



33



108

33:第4層 64・65・69:第8層 80・82:第10層 108:第15層

図版14 A区 包含層出土遺物(2)



34



70



75



73



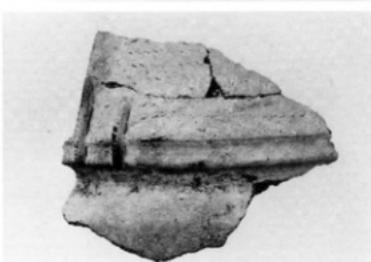
75



74



88



78

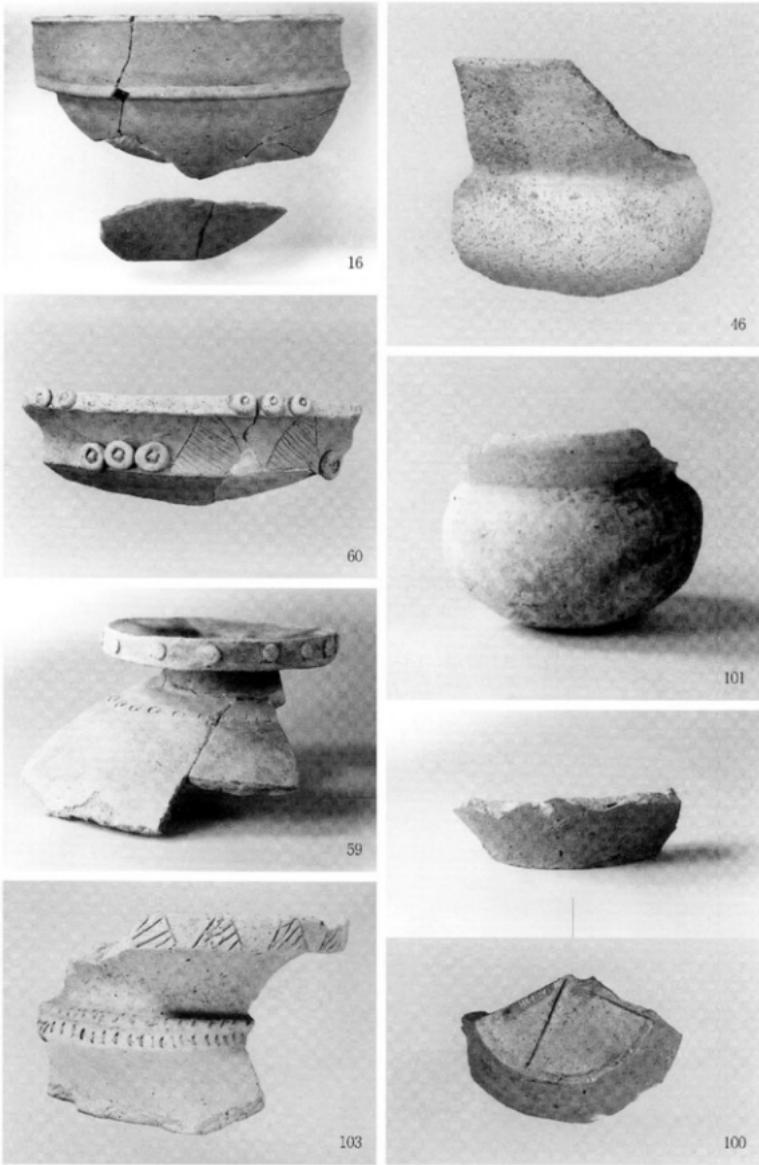
34:第4層 70:第8層 73~75・78・88:第10層

図版 15
A区 包含層出土遺物（3）



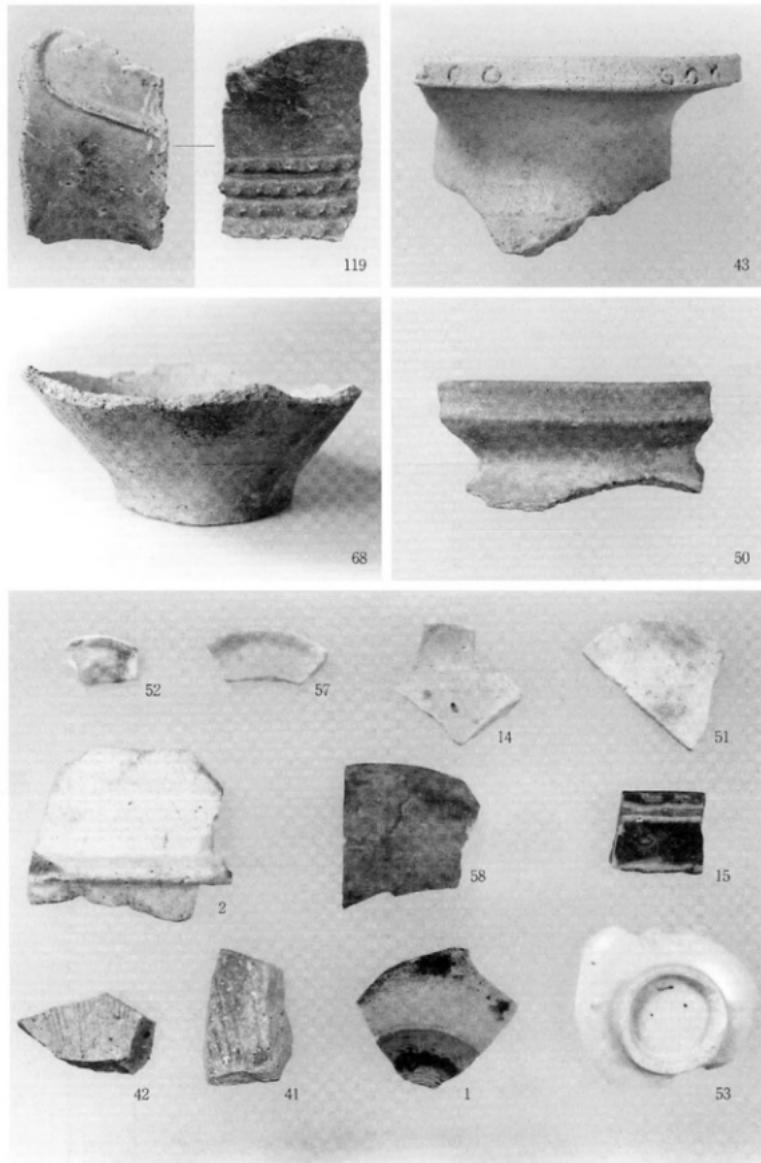
38・39: 第4層 45・48: 第5層 71: 第8層 89・91・93: 第10層

圖版 16
A區 包含層(4)・SD2出土遺物



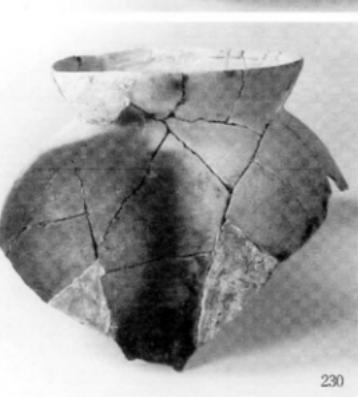
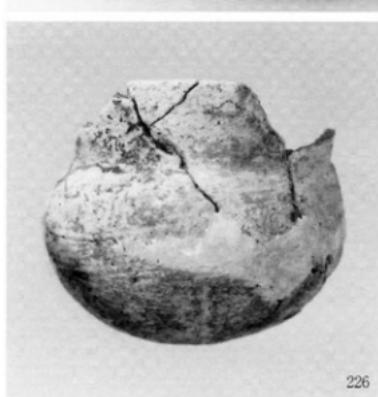
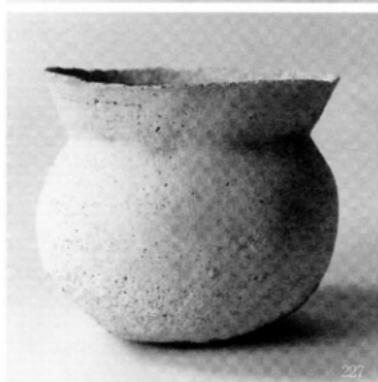
46：第5層 59・60：第8層 100・101：第14・15層 103：第15層 16：SD2

図版 17 A区 各遺構・包含層出土遺物(5)



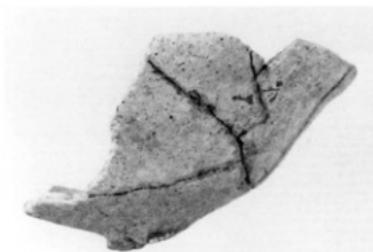
1:P12 2:SK2 14・15:SD2 41～43:第4層 50～53:第5層 57・58:第7層 68:第8層
119:第14・15層

図版 18
B区
土器群SU2・包含層出土遺物(1)



222 : SU2 226 ~ 228 : 第7層 230 : 第10層 235 : 第11層

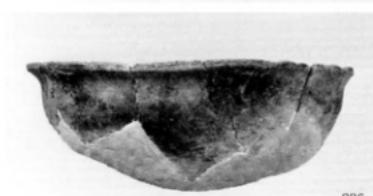
図版 19
B 区 SD4・土器群 SU2・包含層出土遺物 (2)



225



231



236



234



240



216

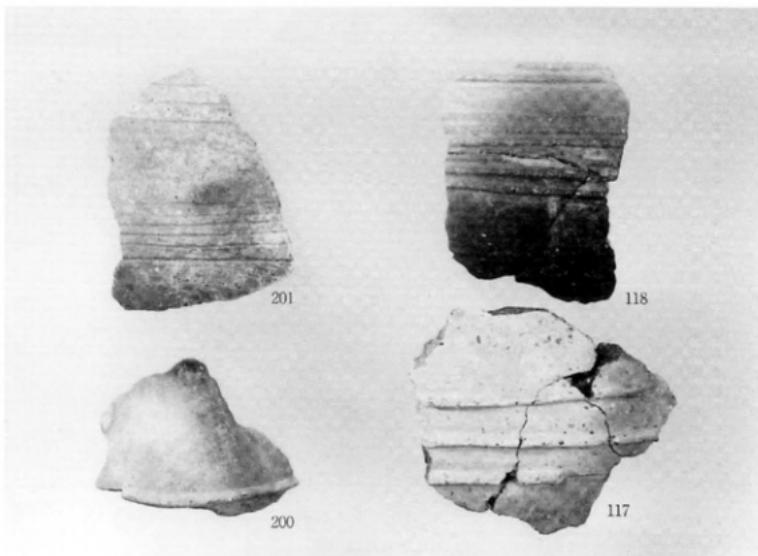
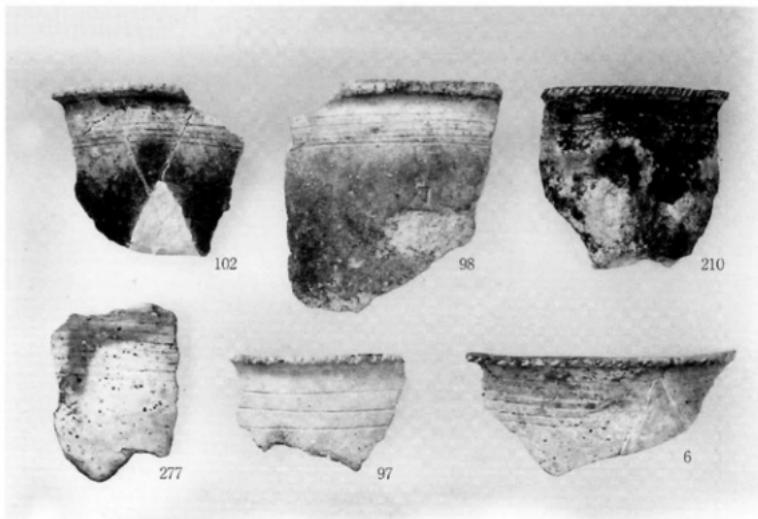


213



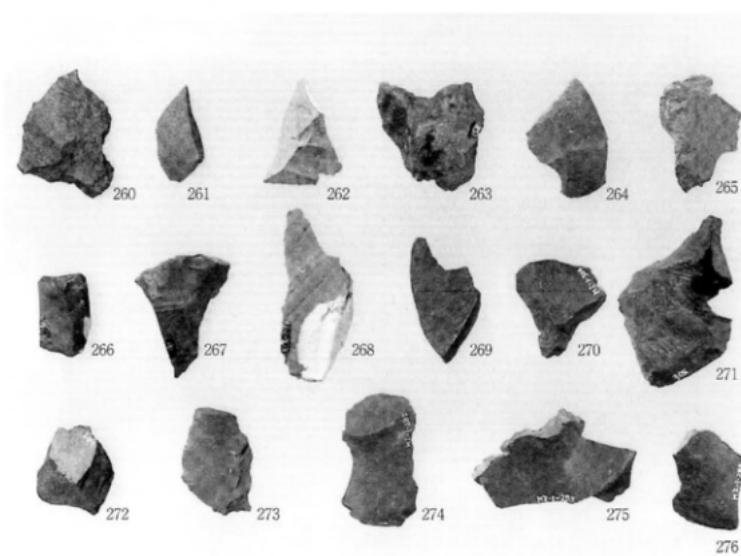
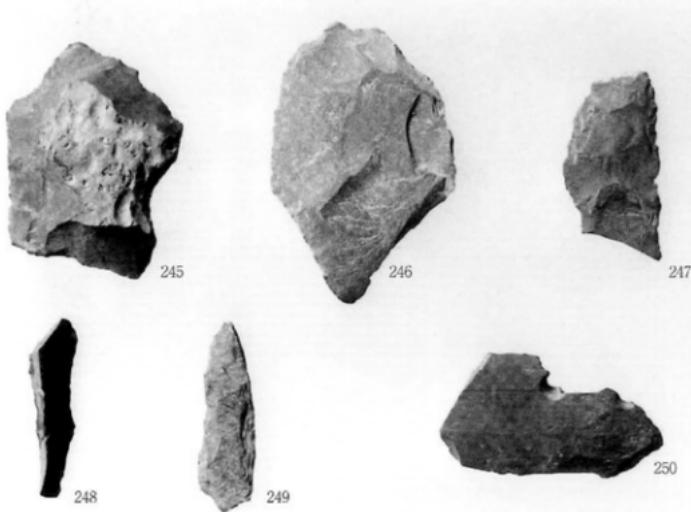
212

212 : SD4 213・216 : SU2 225 : 第 8 層 231・236 : 第 11 層 234 : 第 15 層 240 : 第 20 層

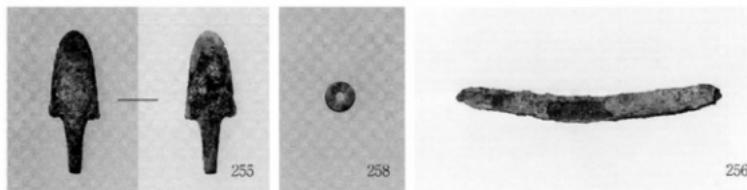
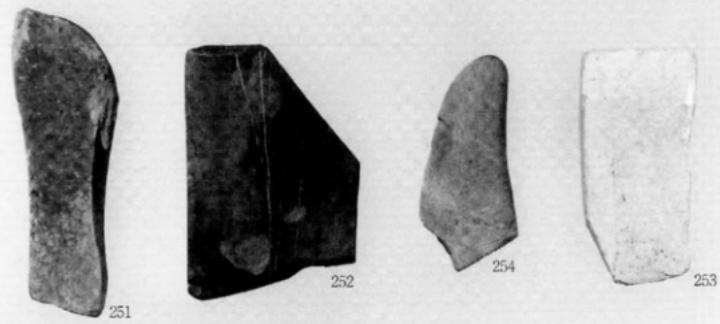


102：第15層 98・97・201：第14・15層 210・6・117・118：SD2 277：P1 200：第14層（以上A区）

図版 21 石器（1）・サヌカイト剥片



245・248・261: SD2 246: 第8層 247・269～272: 第14層 249・273～276: 第14・15層 250: 第11層
260: P3 262・264・265: 第5層 263: 第9層 266・267: 第9'層 268: 第10層 (以上八区)



242: 第4層 243・245: 第15層 251: SD1 252: 第8層 253～255: 第14・15層 256: 第8層
259: 第15層(以上A区) 257: SG1 258: 第7層(以上B区)

